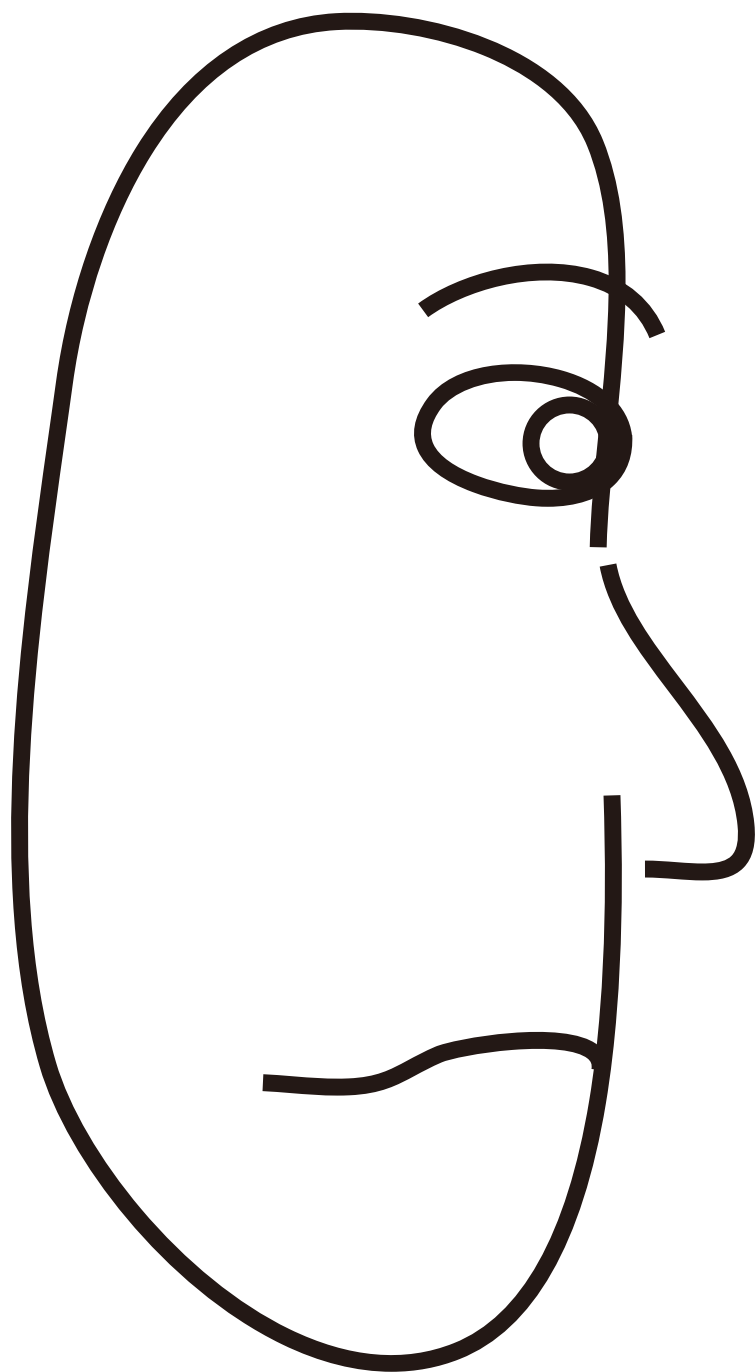


天才的な僧侶たち



2024年8月10日、フリースタイルな僧侶たちは刊行15周年を迎えます。今号はこれまでの感謝を一冊に込めた15周年記念号として、いつもよりちょびっとだけページを増やしてお届けしています。

63号の特集は「謝」です。本当は潔く、特集「ありがとう」としたかったところですが、ちょっとだけ寄り道をしたくて、その一字を選びました。感謝だけではなく、謝罪、代謝の「謝」です。謝には「自分のせいで相手に負担が生じていることを認める」という意味のほかに、「去る」という意味もあるらしく、一字が「ありがとう（感謝）」、「ごめんなさい（謝罪）」、「さようなら（代謝）」につながっているって不思議だなぁ、と思ったところから、この特集ははじまりました。そして、その一字を媒介にした「三謝」の響きあうところに、私たちが「礼」というものへ感じている漠然とした窮屈さを、ほどいてくれるヒントがあるのではないかと、思えてきたのです。

「とりあえず、ありがとうって言っておけばいい」
「お礼を言ったんだから文句ないよな、という牽制でもある」
「ありがとうって言ったら負け」
「ありがとうと言えば言うほど、削られるような感覚がする」

制作を進めていくうちに、「ありがとう」にまつわるさまざまな声を聞きました。たしかに、もうその言葉には、なにかと連呼していた平成初期の頃のような、全員にうんと言わせるほどの説得力はないのかもしれない。

しかしなぜなのか、時たまに「ありがとう」の言葉が、そうしたしがらみをくぐり抜けて、私自身をふっと掬いあげてくれるようなことがあります。そのとき、ありがとうの言葉や、その言葉とともに相手とのあいだで交わされているなにか、今そう言っているその場その一瞬を、愛おしく思えてならないのです。

そのありがとうって、なんなのでしょうか。たとえば、思い出せるのは、ありがとうでは決して言い表せないような恩に会い、それでもありがとうの言葉しか差し出すことができないような歯がゆさを味わったとき。言葉は軽薄で、どうしようもなく無意味で、情けなくて打ちひしがれるけど、それでも差し出さずにはいられなかった。そんなときあふれていた言葉は祈りにも近いような、少なくとも普段交わしている「ありがとう」を紐解くだけでは辿り着けない、さまざまな「謝」が重なり合った言葉のように思えました。

そんなありがとうや、あんなありがとう、そしてフリースタイルな僧侶たちの15年分のありがとうも拾い集めて、今ここから特集「謝」をはじめていきたいと思います。

謝

謝を解き放つ

文＝稲田ズイキ
フリースタイルな僧侶たち 編集長

心に灯る謝を探して

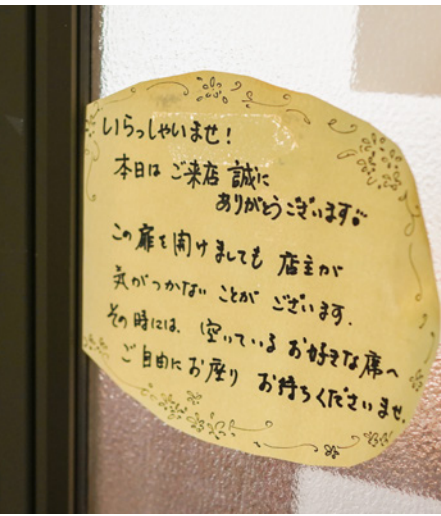


取材・文＝鶴飼ヨシキ

「難聴の人ってとりあえず謝るんです。最初に『ごめんなさい』って言って。それが癖になってしまっているんですね」
「謝」について、柴田さんはまずこう答えた。
「あと、微笑んでしまう。みんなが談笑しているなかで聴き取りづらくて孤独な人だけ、他の人の負担にならないようにとりあえず笑ってしまうんですね。空気を壊したくないという気持ちと、聴こえていないことを悟られたくないプライドの両方を抱えているんです」
難聴は「目に見えない障害」と呼ばれるものの一つだ。さらに聴こえていた経験もある一方で、健聴者の気持ちも理解してしまう。その葛藤を抱えながら人と接する苦しさは僕が想像する以上に大きいものだろう。実際に社会から距離を取る難聴の方は予想するより多いという。

難聴の人って とりあえず謝るんです。 最初に「ごめんなさい」って。

撮影＝わかめかのこ



ゴハンカフェ ひつだんや
京都府京都市中京区鍋屋町232 2階右側
営業時間 10:30~17:00(木曜+不定休)
Instagram@hitudanya

筆談カフェ 「ひつだんや」にて

言葉でのコミュニケーション。古くは手紙などの書面もあれば、近年ではメールやアプリを使ったチャットもまた言葉である。ただ頻度としては、声による他者との交流が多いだろう。「ありがと」や「ごめんなさい」という言葉を幼いころに聞いて学び、学校や社会でそれぞれに適した言葉を口にする。

そもそも声によるコミュニケーションは社会のなかでうまく機能しているのだろうか。僕たちは心や感情というよくわからないものを、体を使って他者に伝える。そう知っているからこそ、相手の言葉には何かしらの想いがこもっていると意識せずとも考えている。しかし、相手の心や感情の本意を知ることができず、自らの経験を用いて予想し判断することでコミュニケーションは成り立っている。もう一方の見方もある。心や感情が先にあるのではなく、習慣的に発する言葉だ。言葉のコミュニケーションにはこの場合が案外多い。普段の挨拶やメールの文末は、半ば条件反射で声や指が発する言葉だ。言葉によるコミュニケーションは、この両方が複合して行われている。一方は経験と予想によって言葉を思考して、もう一方

「話せるけれども喋れないふりすることも結構多いです。滑らかに喋ってしまうと、普通に話しかけられてしまうんですね。説明しても戸惑う顔を見るのがまた苦しい。それだったら最初から話せないふりしてやり取りする方がスムーズに進むから、難聴の人でわざと喋らない人が割といはりますね。話さないことで相手にわかってもらう。これも見えない障害をわからせるひとつの方法ですね」
しかし、この話せないことを演じるとするのは、ある意味では自分を偽ることであり、そこにまた新たな葛藤が生まれないのだろうか、と柴田さんに質問したところ「徹底的に困っている経験があるのが大きいですね」と答えが返ってきた。私の質問は改めて健聴の立場からのものであり、体験を超えた想像の難しさを痛感させられた。

一方、私たちは言葉の表層から真意を汲み取る難しさにも気付かされる。会話しながら微笑む人がいたとき、よほどどこかないか表情が変わらない限りこちらの想いを受け止めてくれていると考えるだろう。そこで両者に関係が生まれ、その後のやりとりではこの関係が持続する。関係を遮断し会話の流れを止めるのは、普段の会話でもストレスがかかるものだ。見えない難聴を見えるものにする、という方法の大きなものに、補聴器をつけ

は習慣によって言葉を伝えて成立する。考えてみるととても複雑な行為だ。そして複雑だからこそ、言葉のコミュニケーションには問題が起こる可能性を常に抱えている。それが「謝」を考えるうえで、僕が興味を持った視点である。

コミュニケーションの複雑さについて考えるなかで、ふと出会った店がある。昼は観光客が往来し、夜は酒の場が集まる人たちが賑やかに京都の先斗町の一角で静かに店を営む「ゴハンカフェひつだんや」だ。
店主の柴田さんご自身は中途失聴である。時を境に音が聴き取りづらくなる経験をした。料理をするのが好きで、誰かに料理をふるまって喜ぶ姿を見たい、その一心が店を開ききっかけになった。しかし以前の難聴を抱えながら社会で働いた経験から、接客対応をする難しさも心得ている。だからこそ、看板に「ひつだんや」と名前を掲げた。それが同じように苦労を体験している難聴・中途失聴の方にとっての居場所になったことに加え、健聴の人も興味を持ってこの店に来られるのは嬉しい驚きだとご本人は笑顔で語る。僕自身も以前にひつだんやの静かな店内で、四条大橋に向かう鴨川の流を眺めながら食べたフレンチトーストの味や、柴田さんとのさまざまな会話を今でも覚えてる。

る行為がある。しかし、補聴器をつけることにもまた葛藤があると柴田さんは言う。
「難聴と一言に言っても、自分自身で受け入れているかどうかで変わりますね。一気に聴こえなくなるのではなく段階的に悪くなる場合、聴力がある程度残っているときはぎりぎり会話ができる。そういう微妙なラインにいるとき『まだ大丈夫、まだ大丈夫……』と思っているんです。難聴だけど障害というところまでは行っていない、と。その時に『聴こえてへんかったん？』とか言われたらプライドがズタズタです。聴覚という五感のひとつを失っていることを認めるのって相当ハードルが高いんです。」

私も自分が障害者だと自覚する前は、補聴器は絶対つけたくないと思ってたんです。当時はまだ『障害は隠せ』という時代で、支障が出ているのにつけることができない。恥ずかしい思いばかりしていても、聴こえていないと言えない。それで、もうこれは無理やと思って初めて補聴器をつけた時に『楽』って思ったんです。ちくはくな受け答えしても『補聴器つけてはるこの人』って気づいてもらえる。障害を表に出すことができるのがすごいと思ったんです。

自覚して受け入れると、優しくされたら感動するんですよ、ありがとぅ！って。純



するので、何気ない会話であるにも関わらず、話の道筋が明確だ。書き方も見ておきたい。筆談というものはアプリのチャットのように上から順に進んでいくものだと思うのだが、実際にはあちこちに線が伸びたり、間を埋めるように言葉が差し込まれたり、思いがこもるからこそ筆が進み、文字の形が崩れたりとはたから見ると整ってはいないものの、書いている方からすると会話の流れという流動的な線が見えている。会話の音量やリアクションのように、筆談にもまた感情の痕跡が読み取れる。

話題は次第に僕の過去に関する話に移る。僕は高校時代、学校に通うことができなかつた時期がある。隠しているわけではなく、いまからもう二十年近く昔のことではあるのだけれど、当時の心情を冷静に顧みることはなかった。あのころの気持ちを書いて他者に伝えるとき、駅の階段を降りることができなかった景色や、日中にひとりで過ごした部屋の光景が蘇る。しかしそこに感情はない。映画のひと場面を描写するように、相手に伝える言葉を選び、空白を文字で埋めていく。過去の記憶を言葉にするというのは、自らの体験を手放し他者にも伝わるものに変化させる行為だ。辛い経験は自分を離れ、そこにできた空白の風通しの心地よさを感じながら、筆談は終わった。

鶉飼ヨシキ
京都裏寺 極楽寺 / 三山木 念佛寺 僧侶。寺での活動のほかにも、podcast配信や大学での文芸イベント企画、音楽活動など、好きなものを好きに楽しんでいます。
Instagram @yoshikiukai

粹に喜んでしまいますね。自身が障害を受け入れているかですごく変わってきます」自分の中の悩みや葛藤を、相手に見せることによって解消するという点に興味を持った。一般的に葛藤やコンプレックスを解決する方法として、「どうになりたい」「どう思われたい」という心情が先にあり、それを表に出すことで解消されていく印象がある。しかしこの場合は相手に見えなかったものが見えることで、自らの悩みを受け入れる基礎が始まるような印象を受ける。

そもそも今回の取材のきっかけにもなったのは、お店に置いてあるノートだった。来店した人が自由に書くことができるノートで、たまに他のお店でも似たようなものは見るのだけれども、このノートには些細な内容でも言葉にかける想いの強さを感じた。

「難聴の方は普段の生活で雑談に飢えてはるんですよ。職場でもみんなが盛り上がっているけど、笑ってごまかしてしまう。優しい人が会話の内容を書いてくれて、申し訳なさもあるし、そもそも雑談って書いて面白さが伝わるものじゃないんですよ。でもここやったら書いて雑談できる。またこの静かな環境やたらしゃべれる。どことも繋がってない難聴の方にとって、ここがありがたい場所になっているんじゃないですか」

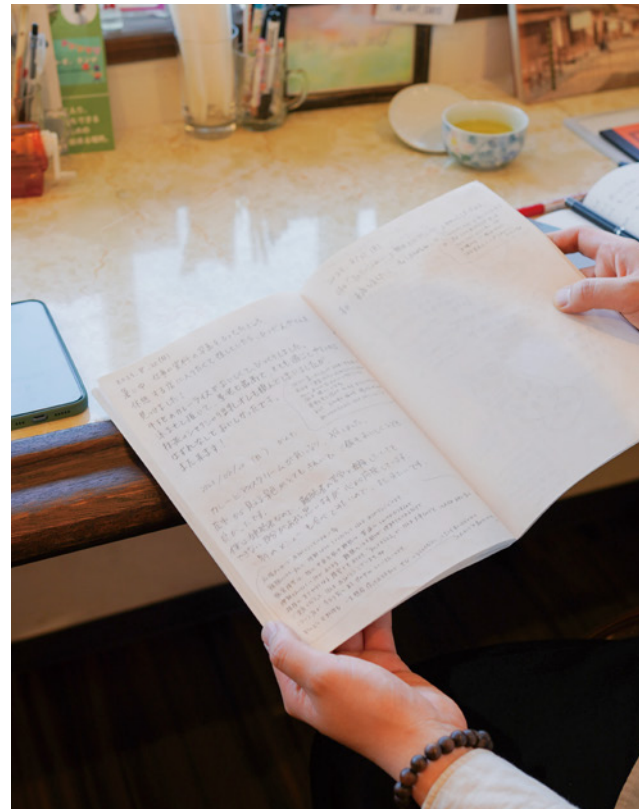
雑談ができない。その一言に静かにショックを受けた。僕たちは無機質に繋がっているのではなく、どうでもいいこととやくだらないことを共有することで人々と共に生きていく。「孤独」という一言だけでは伝わらない、会話を共有できない苦しみの一面に触れた。

難聴や失聴と聞くと、交流手段としてまず手話を思い浮かべた。しかし、このお店は名前の通り筆談を看板に掲げている。筆談もまた言葉によるコミュニケーションだ。しかし筆談というものを知ってはいないものを行ったことはない。そこで今回、柴田さんをお願いして筆談を行ってみたい。ホワイトボードを用意して、まずは挨拶からはじめる。「お昼どこに行かれましたか？」という何気ない質問に対して返答を返す。普段の会話では考えることもなくスラスラと出てくる言葉が、書くという行為に変換されることで、少しだけ考える間を要しながら進む。柴田さんは慣れているからか、その少しの間が僕より短い。

僕が書いた言葉に対して、柴田さんが気になった単語や一文に下線を引き、話題が展開していく。声での会話は、ひとつの話題について話しているように思いながらも、実は色んなポイントに移動しながら話しているのだと気付かされる。筆談は言葉の形にしながら、さらに注目する箇所に下線を引いたり丸をつけた



数冊に渡っているノート。ここからまた交流が生まれる。



ノートには思いが詰まっていて、自由に読むことも、伝えることもできる。

罪を懺悔すること



罪を懺悔すること

この冬、とあるチベット文化圏にお邪魔して、そこで行われている懺悔の儀式に参加した。

日本人は、「すみません」という言葉をよく使う。芸能人が不祥事を起こした時も、その一件に直接関与しない人たちから謝罪を求める声がSNSで叫ばれ、謝罪会見を開く特有の文化がある。こうした謝罪のあり方を見ていると「一体、誰が何のために謝っているのだろう」という疑問が浮かんだ。世間からの声に敏感で、そこから外れることに強い恐れを感じる日本人だから、何か問題が生じると世間からの許しを得るための形式的な謝罪が行われているのだろうか。一方、私がよく行くチベット文化圏では「ごめん」に該当する言葉は存在するが、日本人のように頻繁に使う習慣がない。むしろ些細なことで友人に謝罪した時「謝られると友達じゃないみたい」と言われたことがある。そんな民族に古くから伝わる懺悔の儀式では、誰が何に懺悔するのだろうか。

初めてチベット文化圏に行ったのは大学の頃で、もう10年以上経つ。ある時、人里離れた山にある寺の参道を歩いていると僧侶から「この地域のリアルを知るには村に行ったほうがいい」と話しかけられた。そして初対面にも関わらず、実家の住所を書いた紙をもらい、その紙を頼りに村を訪れて彼の両親と対面するも、私が来るのが全く共有されておらず「あなた、誰？何しに来たの？」と言われた。それから事情を説明していると「まあ、とりあえず家に

上がって。お茶飲んで」となり、その成り行きで、2週間ステイすることになった。見ず知らずの外国人をアポなしで迎えること自体、日本ではあり得ない。どうやって、その懐の広さを育んでいるのか。その理由が知りたくて、今もおチベット文化圏に足しげく通っている。

チベット仏教徒の間では、人間に生まれることは尊く、その境遇を得た今世では悪いことを避けて、善い行いをすることが共有されている。そして彼らの社会では、輪廻の思想は疑う余地のない事実である。なので、たとえ今世で人間だったとしても、自分の行い次第で、来世は虫に生まれる可能性もある。だからなのか、年に1〜2回、日ごろの行いを仏教の教えに照らし合わせて見つめ直し、自身の「罪」を悔過する儀式が行われている。チベット語で「罪」と呼ばれる儀式だ。私が参加した儀式は、尼僧と在家信者が参加し、16日間に渡って行われていた。2日に一度、食べ物・飲み物などを完全に断つ日があり、参加者はそれを守りつつ、儀式の中で自身の罪を仏の前で懺悔していく。儀式の詳しいルールや内容については、今回は触れないが、現地の人にとっても、心身ともかなりハードな期間であることに違いない。私はというと、日本で食事を抜くことはたまにあるし「ちょっと頑張れば、乗り切れるだろう」と参加してみたものの、5日目を過ぎたあたりから、毎日、Tibetooでお寿司の画像を検索するようになった。空腹になると精

行できてなくて、すみません」とか「いい年なのに何一つ満足に達成したことがなくて、すみません」とか、そんなことが浮かんだ。空間のマジックなのか、「彼女たちからしてもらったように優しい気持ちで他者と接することができそうですよ」「全ての生き物から苦しみ取り除かれますように」という思いを抱くこともあった。

儀式が終わった今、自分の行いを改めて見つめてみると、微細なレベルから大きなものまで自分の身勝手な行為は依然として繰り返されていて、罪を悔過する前とほとんど変わらない。じゃあ、あの儀式は無駄だったのだろうか。というと、そうとは言えない。短い期間ではあるが、仏教の規範に則り、限りなく大きな存在を感じながら暮らすことで、いかに自分が不甲斐ない生き物なのか知ることができたからだ。

儀式を通じて、懺悔と謝罪の違いについて考えた。懺悔は特定の誰かや世間に対して頭を下げ、マイナスを0に近づけるような謝罪とは性質が違う。懺悔の基本は、自分自身の行いを恥じて、それが精進の種だと捉えた時に生じる思いを起こすことではないだろうか。自身の煩惱、未熟な側面を醜いものとして見ると、反射的に排除したくなるのだが、それも自分の一部であると認められると、無意識に感じている精神的な圧迫から解放される気がした。自分の劣る部分を見つけては「ダメな奴だ」と認定してしまふ行為は、自分を攻撃していると

も言える。それと同様に自分を必要以上に大きく見せる振る舞いの根底にも、劣等感がつきまとう。ないものねだりは尽きないのだが、どんな素敵な人にも心の偏りはあるだろう。そして自分の良い部分も嫌な部分も、自分を構成する要素の1パーツにすぎない。

知り合いのチベット人が「人はすぐに効果を得られるものを選びたがるが、仏教はそんなに簡単なものではない」と言っていた。これまで何の修行もしてこなかった私のような人間が、一度、懺悔の儀式に参加しただけで何か得られる方が怖いし、現実的に考えると、人間はすぐに変われない。だから、何度も同じような過ちを繰り返しつつも、その度に「ミリずつ心を動かしていくことが大事なのではないだろうか。」「いつまで経っても何も変わらない」と嘆くだけでなく、何か少しずつ行動しなければ、今まで私に優しく接してくれた人の思いを本当に無碍にしよう。

小さな決意表明をここに残し、このエッセイを終了したいと思う。

1 チベット文化圏で暮らす人は、魚を食べる事を避けている。いろんな理由があるのだが、その一つとして、彼らが小さなちりめんじゃこも、大きな牛も等しい生命体だと捉えていることが挙げられる。殺生は避けるべき行為であり、小さな生き物でお腹を満たそうとする場合、何匹もの命が犠牲になってしまうからだ。断食儀式中に「寿司を食べたくなっ」なんてことは、彼らの前では決して口にできない。



神的にも不安定になる。生命力が限界に近づくと、涙が溢れた」という話を聞いたことがあった。自分も同じような感情を抱くかと思ったが、残念ながらそれほど強い気持ち湧き上がらない。私は浄土真宗の門徒の家庭に生まれたが、信仰心が薄いのか、仏教徒であると自信をもって言えない。それは、チベット文化圏に住む人々が激まなく仏に信頼を寄せ、仏教を信仰すること抜きに成立しない暮らしのあり方を目の当たりにしているからかもしれない。仏教は自分の気分によって信仰したり、信仰しな

かったりするものではないのに、私は仏教の教えを意識した生き方ができていない。そんないい加減な私が彼らと同じ環境に身を置き、見様見真似で五体投地しているとき、自分が積んできた罪の懺悔よりも先に「この場に見合うような人物でもないのに、快く受け入れてくれて申し訳ない」という気持ちで反芻した。断食しながら、一日中、五体投地や読経を繰り返すのだから、いくら体力のある現地の人だからといって辛いに決まっている。それなのに、「お腹空いてない？ちょっと休む？」と何度も声をかけてくれた。その感じは、本当の母のよう。仏教に帰依する人々と共に過ごすことによって、自分自身が照らし出される。すると、「いい年(34歳)なのに、何一つ親孝

写真・文=藤山亜弓
京都在住、大学院でチベット文化圏の民間信仰について研究しています。凍らせたブルーベリーとサンゴールドキウイをヨーグルトに入れて食べるのにハマっています。

ケンカと奉火

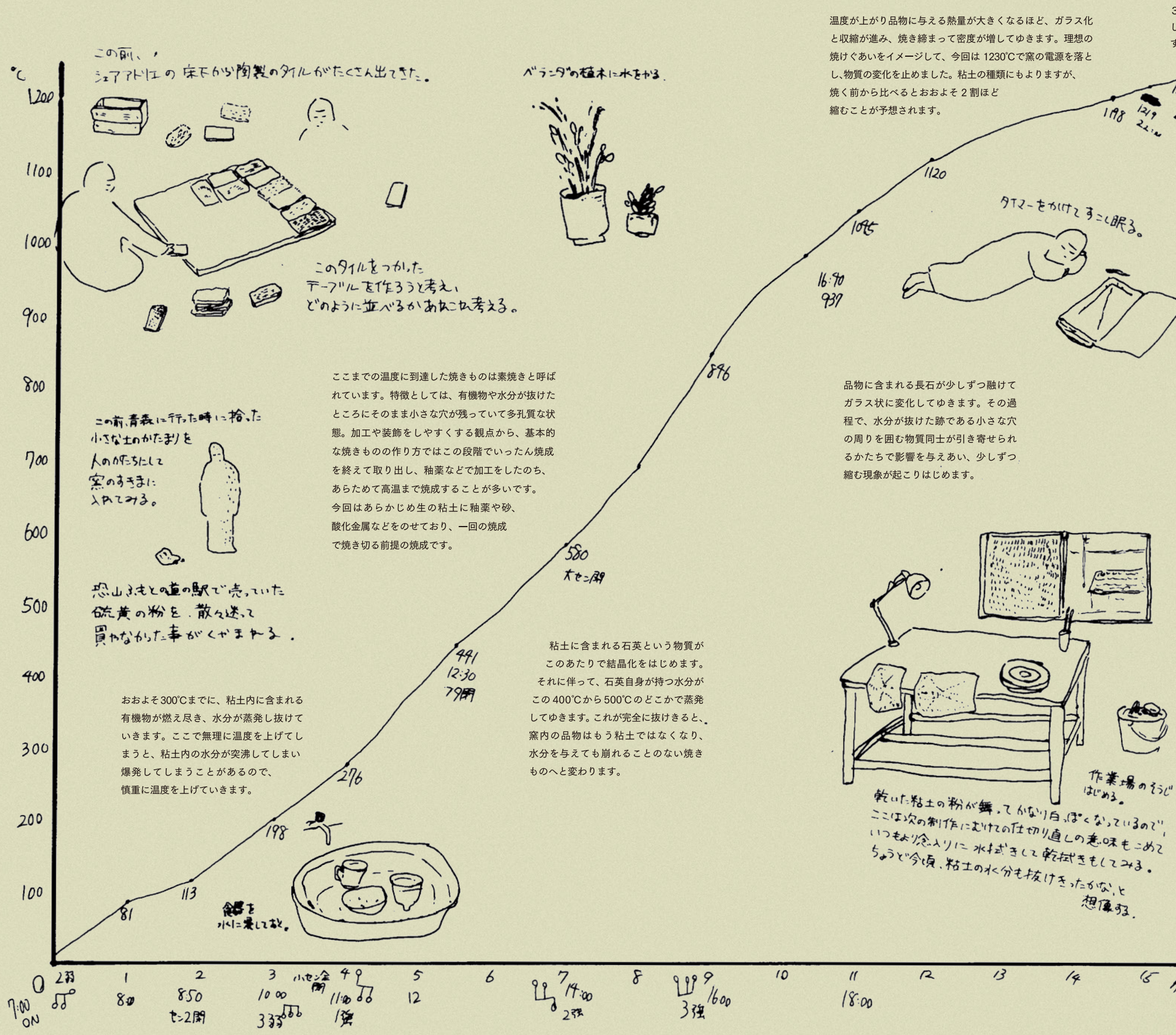
左義長まつり、近江八幡にて



文・写真=稲田ズイキ

ケンカから数時間後のこと。暗闇に包まれた神社では、「マッセマッセ」の掛け声のもと、十三基の左義長の山車が酔い潰れた龍のように境内を回遊していた。ひとたび左義長が鎮座すれば、しんと空気が変わる。息を吞んで火が灯される瞬間を待った。火除け、厄除け、五穀豊稔の願いを込めて、焼かれる左義長。美しくつくりあげ、破壊しあい、炎に散って、灰は願いに変わり、街に降り注ぐ。ケンカから奉火へ。はじまりは古く、長く続いているこの祭りの謝は、懐が深い。

さっきまで街中を巡行していた左義長の山車が、「セーノセ」の掛け声を合図に、もう一方の山車に突撃した。それが「ケンカ」のはじまりだった。自治体ごとに神社に奉納された十三基の左義長は意匠の美しさを競い合ったのち、一転してこのぶつけあいの儀式をくりひろげる。「あかん、泣きそう」と、左義長の担ぎ手の青年が言葉を漏らしていた。その涙のわけはなんだったのだろう。熱狂渦巻く境内で、ケンカが奉納であることの意味を考えていた。



陶芸と供養

焼きものを待ちながら

武内もも

こんにちは、武内ももといいます。京都にて陶芸を扱う作品制作をしています。自分の住む街や外出先で少しずつ粘土を集めながら、粘土や焼きものが持つ時間感覚や、焼きものが人の暮らしとともに過ごすということに関心を持って制作しています。このたび、「供養」というテーマで陶芸にまつわる記事を書いていただきたいという、おもしろい依頼をいただきました。どんな内容にしようかと考えたときに、ふと焼成グラフのことを連想しました。



《石と草》(2023) Photo by Haruka Oka

普段わたしは電気温度を上げる窯を用いて制作をしているのですが、手動での操作となるため、粘土を焼きものにするためには大体14時間ほど窯の面倒を見ながらその日を過ごすこととなります。そこで焼成の指針となるのが、焼成グラフです。これはどのくらいの時間をかけて何度まで上げるのか予め検討を立て、実際にどのように焼成を進めたかを記録するもので、ふつうは表立たないものですが、普段環境として私たちの周りを取りまく大地が素材として取り分けられ、人の暮らしに属する焼きものへとかたちを変えてゆく、その過程の記録でもあると考えています。

今回は、かつて私が記録した焼成グラフを元に、温度や熱によって粘土が変容していく道のりについて、また、それと同時に伴走する陶芸の制作者自身についての記録を、副音声のようなかたちで追記してみました。いまここにいる人と人同士の関係だけでなく、その周りを取りまく物質やもの、環境や現象とともに時間を共有し関係を持ち続けることの愛しさを見つけることができたかと思っています。

ここに書かれている陶芸の制作については、「新訂 古陶磁の科学」(内藤 匡)を参考にしつつ、制作者自身が陶芸を扱うなかでの実感に基づいて書かれています。



3 無心で踊る

私の代謝はクラブに音楽を聴きに行くこと。無心で踊ると、不思議とゾーンに入ったようになる時があります。まるでそこに自分しか居ないような、気持ちが手放されるような感覚がありますね。あとは料理をすること。好きな味付けの物を、好きなだけ食べれるって、幸福感を味わうのに一番手っ取り早い気がします。頑張った分、すぐに見返りがあると言うか。あとは友だちと話す。InputとOutputを繰り返すことです。

まやこんぶ・Lady Gayaさん
35歳 / DJ・飲食業

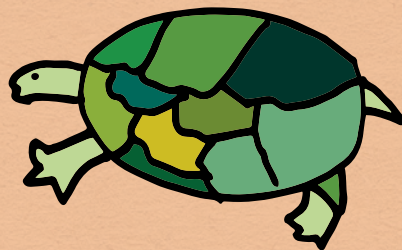


何度もフラッシュバックする悩みは、無理に解決しようとせず、そのままにしていることが多いです。やっているのは、悩みが思い浮かんだときに、今自分はこういうことを考えているなあ、と気づくこと。瞑想のテクニックに近いのかもしれない。一日10回思い出していたことが、次は5回になり、徐々に距離がとれるようになります。すると、少しずつ受け入れられて、自然に思い出せるようになることが多いです。

藤井泰玄さん
33歳 / 僧侶



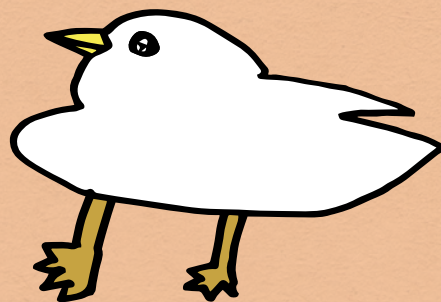
4 気づく



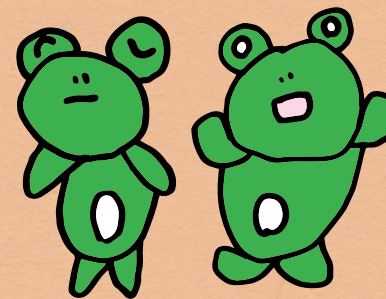
内面に居座り続ける感情や八方ふさがりの思いに、自分なりの代謝を促すとすれば、その原因となる事柄を一度客観的に眺めてみようとするのでしょうか。まるで他の人におこってしまったことのように、傍観者のように眺めてみる。そうすれば反省やら肯定やらと様々な感情が湧きでてきて、その気持ちに素直に従い行動を起こしてみると、とてもスッキリすることが多いような。ただそう簡単にいかないことも多々ありますが。

農家女子さん
63歳 / 園芸業

5 傍観者のように眺める



1 一旦置いて、忘れる



長年サッカーでゴールキーパーを担当しているので、周りを見て和ませようとする癖があり、できるだけ全体を客観的に見るように心がけるようにしています。そうはいっても、仕事でもチーム内に不和があったときに、自分は何もできなかったなあ、と後悔を引きずってしまうこともあります。仕事するなかで、誰か強い感情をぶつけている人がいたときは、全体の淀んだ空気を流すように、あえて僕も強い感情をぶつけ返すこともあって、立ち位置を変化させています。

太ももがウエストさん
30代 / 体育教師

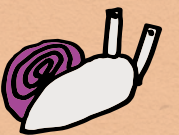
からだに代謝があるように、
ころころにも代謝があるのかもしれない。
日々の暮らしのなかで、とある気持ちや、
ものごと、記憶、漠然とした流れのようなものが、
自分のなかに持続し、残り続ける。
そんなときの、自分なりの代謝を促す
手段を尋ねました。
あなたの代謝はどんなふうに使われていますか？

編集=わかめかのこ
イラスト=NIKO(小学1年生)



うちは自営業で工務店やってるから、いつ仕事がなくなるかわからんって先行きの不安はよく感じる。昔は自分で手を動かすことが多かったから、ものづくりに集中すれば、そういうのは無くなったけど、今は営業や段取り組みが増えてきたから余計に。奥さんに励ましてもらうたり、子どもと遊んだり、その間は考えずに済むなあ。解消しようがないから、そういうのは一旦置いて忘れてのくりかえしやね。

黒川 匠さん
50歳 / 大工



2 立ち位置を変える

わかめ(わ) 以前、だいちゃんと本を読む行為って、食べて身体に入っていくって知らん間に出て行っている状態に近くなって話をして。本を読む行為にも、自分の本棚にも代謝ってものが存在している気がしたんです。何か停滞すると、代謝がわるい、巡りがわるいというのと一緒に、自分の本棚はときどき代謝が悪いなあと思うんですよね。



編集=わかめかのこ

わ そうそう。逆に、図書館は代謝、巡りがいいなあと思う。誰かが必要としないもの、必要とされるものがあるって。「読みたい」という好奇心が本と結びついて、どこか別の場所へいって、また図書館にかえってくる。保有しているのに、保有していない感じ。

大智(だ) うんうん。代謝であり、循環みたいなね。勝手に流れていく仕組みのような。
う だいさんが、ふるえる書庫をはじめたきっかけは？

だ 父親の本が山ほどあって、本当に代謝が悪い状態だったんです。家にも寺にも研究室にも本が大量。だから、元々点在しての本を1か所に集めて整理したいなって父と話をしていた。最初はスペースを借りようかみたいな話をしていたけど、この



©Kazuyuki Okada

読書と場所とその代謝について

大阪池田にある、ふるえる書庫にて。本を読むこと、言葉にすること、場所をひらくこと。あれやこれやと3人で雑談しました。



わかめかのこ 早寝早起き、朝散歩が日課。好きな食べ物はわかめ。

鵜飼ヨシキ 笑い声の特徴的なお坊さん。車間距離取りがち。

釋 大智 ポール・マッカートニーと同じ誕生日。梅昆布茶にはまっている。

撮影=鵜飼ヨシキ

3万冊ある本を、それぞれ自分たちだけで消化するみたいなのはちょっと無理だなあと思って。
う たしかにこの量は、一人で扱おうとすると胃もたれしそう。
だ だから地域にひらいて、文化的な資源として何かこう還元できひんかなみたいなので、ふるえる書庫になりました。

わ 私と鵜飼さんは初めて来させてもらったけど、なんか本棚の佇まいというか、居心地がめっちゃいいですね。
う それ、僕も思った。近寄りやすい本棚ってあるけど、ここは近寄りやすく感じるなあ。手に取るのを躊躇しないというか。

だ 最初は、綺麗にジャンルとかに分けて並べたいなとか思ってたんですけど「雑多に並んでるからこそ出会いがあって面白い」という言葉ももたらして。そういう言葉に甘えて何もないです(笑)。雑多さが近寄りやすさになってるのかなあ。
わ 相手の意図が見えすぎると、怖くなってくるというか。なんなんでしょうね。何かこう本棚が、迫ってくる感じ。
だ 完成されていると、自分の思考が



ふるえる書庫
大阪府池田市古江町451
Instagram @furueru_shoko

入りづらいですよ。ちなみに、その代謝とか循環の話とかいうと、この書庫を作る時に独立研究者の森田真生さんに相談してみたんですよ。どんな書庫がいいですかね？って。そしたら、半地下という地下がある書庫はどう？って。

う 半地下から。面白いなあ。
だ 地下というか、もう床が地面で土になっていて、そこに読まなくなった本をどんどん掘りこんでいくと、長い年月をかけて、その本が腐っていくって、情報が土に還っていくような。情報版コンポスト的な。たまに土を回して、空気をいれて、みたいな。

わ ふるえる書庫にはどんな人がくるんですか？
だ 僕は最初、本だけ読みにくる人が来ると思ってたんですよ。でも全然

空気がいれて、みたいな。
だ そうそう。実際にはやっぱりできなかったんですけど、考え方とか概念はめっちゃ面白いなと思ったんです。森田さんのウェブサイトに、時間が経つと寄稿した文が滲んで消えていく仕様に なっていて。情報そのものを代謝や循環を促す仕組みが、面白いなあ。



のなのに、それにマイがつく。
わ 全然見えない誰かのための公共性というよりは、身近な安心できる場所みたいなニュアンスですかね。近所の公園とか、京都の鴨川とかが頭に浮かぶなあ。

だ そうそう。小さい公共。自分が好きなものをオープンにして、これに共感できる人はそれに来てくださいな、ぐらいいの小さい場所とか空間とか。「誰でも受け入れられます！」って、あまりリアルではないなあ。小さい公共が地域にたくさんあるっていう方が理想的じゃないかみたいな話を田中さんの本ではされていて。

う 公共って行政が市民のために、みたいな規模感で考えられがちだけど、個人が持っているものであったり、興味あるものを開いたりって感じか。必要ですよ。僕のお寺もその辺のことをよく考えてますわ。



だ ちょっと話変わるんですけど、2人とも月何冊くらい本読んでいます？

う 僕は読めなくなっていますね。月1、2冊のペースかな。忙しくなったのもあると思うんですが、それ以外にもなんか理由ありそうな気がするなあ。

わ 私月2、3冊ですね。20代の頃は没頭し続けてたので、いろんなジャンルをたくさん読めてたけど、今は身体とか東洋医学とかそういうのが多いですね。う たしかに僕も、人文系に最近は絞られているな。

だ 実践するための読書の？

わ そうかも。日々の生活のための読書かな。どこかヘトリップするための読書ではないかも。

だ 僕も20代の手当たり次第読んでいたときより随分変わっているんですよ。若松英輔さんの講演を企画させてもらったときに、若松さんが「本は量じゃないよ。有限だから。自分にとって、いい本に出

会ってくださいね」って教えてくださった。

わ ああ、なんか安心します。最近読めてないなああって、なんとなく罪悪感に包まれていました。

だ あと、毎日何か自分の言葉をノートに書いてくださいます。何も書けなかったら、「何も書けない」と書いてつても教えてもらいました。

わ 自分の今を外に出す、代謝ですね。

だ まさにそうだなと思います。自分の中から外へ出す感覚。本にある言葉や先人の言葉は街灯で、自分を導く言葉は自分からしか出ない。そういう言葉といつか出会ってほしいって教えてもらったんですよ。

う 本を読んだり、情報を入れるだけでは、過食になっちゃう感じですね。すぐに出しておく、というね。それも代謝や。

わ しかもそれが誰かのための外向けのための言葉ではなくって、自分が読むための言葉だけのも、なんかしっくりくるなあ。

だ そうそれが、いつか自分にかえってくる。出したときの言葉に自分が救われるときが来るんですよ。そういうのに出会えるといいなあと思います。

わたしの代謝を促す本たち 雑談の記憶をふりかえりながら、3人それぞれの代謝を促す本の存在を考えてみました。

『BODY JOURNEY—
手あての人とセルフケア』
つるやももこ
アノニマ・スタジオ (2020年)

からだところ、両方あって「わたし」であると気づかせてくれた1冊。からだのつかえは、こころのつかえである。その逆もしかり。つかえがあることに気づいたら、とにかく歩く。そうすれば、からだもこころも自分の心地よい場所に戻っていくよう。日々実践中。(わかめ)

『うらおもて人生録』
色川武大
新潮社 (1987年)

若い「劣等生」に向けて書かれた人生録。いまだに噛み砕きながら消化しているのですが、歳を重ね勝負が必要になった場面で、もしかしてこの瞬間のことを言っていたんじゃないかと、ふと本書の言葉が心に湧きます。ほくにとって滋養の溢れる一冊です。(鶏飼)

『センス・オブ・ワンダー』
レイチェル・カーソン、森田真生
筑摩書房 (2024年)

森田真生さんによる『センス・オブ・ワンダー』の新訳と「そのつづき」。大人と子どもが自然のなかで同じ時間を過ごし、自然の驚異や不思議に感性を開いていく。娘が生まれた年に読めたということもあり、まさに「腑に落ちた」。本にも撰取すべき時期やタイミングがあるのだろう。(大智)



発行史

2009-2024

編集＝秦 正顕

フリスタが15年間で出した号はのべ63冊。これまでの歩みを、歴代編集長のコメントとともに、年表で振り返りました。フリスタ15年の歩みをご自身の人生と共に振り返っていただけましたら幸いです。

10 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

11 チベットを知るそして日本を知る

12 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

13 「生かされる自由エネルギー」に挑戦！

14 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

15 ダライ・ラマ法王と高野山

16 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

17 「僧侶として歌う道」三浦明利

18 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

19 お坊さんへの質問1000に答える

20 過去のなかにある未来

21 東日本大震災被災地の今を訪ねて

22 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

23 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

24 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

25 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

26 お坊さんはなぜカクコイイのか?

27 ウルト木魚 日本を救う!

28 「お寺に行こう!」

29 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

30 この時代のものとなれ仏教

31 お寺で宇宙学とは?

32 歌は自分と向き合う道

33 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

仏教のあり方を フリースタイルに 考えていこう!

初代代表 / 編集長 池口龍法

2010年

1 次の時代の仏教のために
フリスタの出発点は、「仏教って本当に苦しみを解決してくれるのか?」という問いでした。当時の自分は20代後半で、同世代の人と一緒に仏教を眺めたいという思いがありました。ただその頃のお寺は、今よりもさらに敷居が高く、お寺にも仏教にも興味はあるけど、情報が少なく近づきたいという声が多かった。だからフリスタが専内役として、仏教が身近になるような情報をとにかく出し続けるということを目標にしています。

2 「和」の精神を生きる

3 お寺に生まれ「僧侶×何か」が必要な時代に「池口龍法×福田昇研」

4 暖かいおじぎりを届けたい。…とさじの空活動に参加

5 生きる仏教を、実践

6 若手僧侶と一般人を繋ぐプロジェクトをスタート

7 伝統と革新のあいだ

8 お坊さんは面白い!!

9 自死問題に本気で向き合う

2011年

10 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

11 チベットを知るそして日本を知る

12 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

13 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

14 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

15 ダライ・ラマ法王と高野山

16 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

17 「僧侶として歌う道」三浦明利

18 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

19 お坊さんへの質問1000に答える

20 過去のなかにある未来

21 東日本大震災被災地の今を訪ねて

22 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

23 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

24 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

25 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

26 お坊さんはなぜカクコイイのか?

27 ウルト木魚 日本を救う!

28 「お寺に行こう!」

29 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

30 この時代のものとなれ仏教

31 お寺で宇宙学とは?

32 歌は自分と向き合う道

33 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2012年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2013年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2014年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2015年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2016年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2017年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2018年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2019年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2020年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2021年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2022年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2023年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2024年

1 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる

2 チベットを知るそして日本を知る

3 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想

4 「生かされる自由エネルギー」に挑戦!

5 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?

6 ダライ・ラマ法王と高野山

7 インターネット寺院「彼岸寺」に込める

8 「僧侶として歌う道」三浦明利

9 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました

10 お坊さんへの質問1000に答える

11 過去のなかにある未来

12 東日本大震災被災地の今を訪ねて

13 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」

14 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!

15 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる

16 心が傷ついた子どもたちを救いたい! 支援団体「メッタ」!

17 お坊さんはなぜカクコイイのか?

18 ウルト木魚 日本を救う!

19 「お寺に行こう!」

20 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?

21 この時代のものとなれ仏教

22 お寺で宇宙学とは?

23 歌は自分と向き合う道

24 「坊さんはなぜガッコイイのか? Part 2」

2016年

34 ヤマブキブナ法話

35 仏教マンガ「あした死ぬかもよ?」

36 アナログレコードとお葬式

37 僧侶の目から見える「苦悩の光景」

38 自分のために「四国僧侶 路上の供養」

39 ふっつのお坊さんの生誕

2017年

40 魚を売るのも僧侶の仕事

41 お坊さんの恋愛事情

42 拝観料のゆくえ

43 フリスタが見た「僧侶アイドル」の素顔

44 進化系お守り

45 死の体験旅行

46 フリスタの「中の人」

47 仏教が私にくれたもの

48 おてらおやつクラブ

49 苦めるいは生きつづらぬその先へ

2018年

50 吉村昇洋

51 フェリンモおてらぶ

52 修行

53 お寺と奥様の化学反応

54 少女がつむぐ、等身大の仏教「仏女新聞」

55 仏教の未来に挑戦し続ける10周年

56 「5.15」で4コマ説法?!

57 お参りの記録共有サイト「ホトカミ」

58 本気で地獄

59 ヒトトリ

60 BIG LOVE

61 休む

62 金

63 謝

64 ??

2019年

65 修行

66 修行

67 修行

68 修行

69 修行

70 修行

71 修行

72 修行

73 修行

74 修行

75 修行

76 修行

77 修行

78 修行

79 修行

80 修行

81 修行

82 修行

83 修行

84 修行

85 修行

86 修行

87 修行

88 修行

89 修行

90 修行

91 修行

92 修行

93 修行

94 修行

95 修行

96 修行

97 修行

98 修行

99 修行

100 修行

2020年

101 修行

102 修行

103 修行

104 修行

105 修行

106 修行

107 修行

108 修行

109 修行

110 修行

111 修行

112 修行

113 修行

114 修行

115 修行

116 修行

117 修行

118 修行

119 修行

120 修行

121 修行

122 修行

123 修行

124 修行

125 修行

126 修行

127 修行

128 修行

129 修行

130 修行

131 修行

132 修行

133 修行

134 修行

135 修行

136 修行

137 修行

138 修行

139 修行

140 修行

141 修行

142 修行

143 修行

144 修行

145 修行

146 修行

147 修行

148 修行

149 修行

150 修行

2021年

151 修行

152 修行

153 修行

154 修行

155 修行

156 修行

157 修行

158 修行

159 修行

160 修行

161 修行

162 修行

163 修行

164 修行

165 修行

166 修行

167 修行

168 修行

169 修行

170 修行

171 修行

172 修行

173 修行

174 修行

175 修行

176 修行

177 修行

178 修行

179 修行

180 修行

181 修行

182 修行

183 修行

184 修行

185 修行

186 修行

187 修行

188 修行

189 修行

190 修行

191 修行

192 修行

193 修行

194 修行

195 修行

196 修行

197 修行

198 修行

199 修行

200 修行

2022年

201 修行

202 修行

203 修行

204 修行

205 修行

206 修行

207 修行

208 修行

209 修行

210 修行

211 修行

212 修行

213 修行

214 修行

215 修行

216 修行

217 修行

218 修行

219 修行

220 修行

221 修行

222 修行

223 修行

224 修行

225 修行

226 修行

227 修行

228 修行

229 修行

230 修行

231 修行

232 修行

233 修行

234 修行

235 修行

236 修行

237 修行

238 修行

239 修行

240 修行

241 修行

242 修行

243 修行

244 修行

245 修行

246 修行

247 修行

248 修行

249 修行

250 修行

2023年

251 修行

252 修行

253 修行

254 修行

255 修行

256 修行

257 修行

258 修行

259 修行

260 修行

261 修行

262 修行

263 修行

264 修行

265 修行

266 修行

267 修行

268 修行

269 修行

270 修行

271 修行

272 修行

273 修行

274 修行

275 修行

276 修行

277 修行

278 修行

279 修行

280 修行

281 修行

282 修行

283 修行

284 修行

285 修行

286 修行

287 修行

288 修行

289 修行

290 修行

291 修行

292 修行

293 修行

294 修行

295 修行

296 修行

297 修行

298 修行

299 修行

300 修行

2024年

301 修行

302 修行

303 修行

304 修行

305 修行

306 修行

307 修行

308 修行

309 修行

310 修行

311 修行

312 修行

313 修行

314 修行

315 修行

316 修行

317 修行

318 修行

319 修行

320 修行

321 修行

322 修行

323 修行

324 修行

325 修行

326 修行

327 修行

328 修行

329 修行

330 修行

331 修行

332 修行

333 修行

334 修行

335 修行

336 修行

337 修行

338 修行

339 修行

340 修行

仏教と編集の今日まで そして明日から 稲田ズイキ×杉本恭子



いま私たちが言うお経とは、「結集」といって釈尊の死後、弟子たちが一同に介して会議を開き、その教えをまとめたものです。つまり、仏教は「編集」によって生まれたといえるのかもしれませんが。この15周年記念号で編集長を退任する稲田たつへの希望で、杉本恭子さんとこれまでの制作を振り返りながら、編集と仏教にまつわる対談を行いました。

杉本 恭子
フリーの編集・ライター。大阪生、京都在住。同志社大学大学院文学研究科新聞学専攻修了。自治的な場に関心をもち、寺院、NPO法人、中山間地域でのまちづくりなどを主なフィールドにインタビュー・取材を行っている。著書に『京大の文化事典—自由とカオスの生態系』（フィルムアート社）がある。

稲 え、忘れてるかも……
杉 「稲田さんは才能あるんやし、世の中の形みたいなのに合わせんでいいんちゃう」って、心の底からの言葉を伝えたら、
稲 あ、待って、思い出しました！
杉 「今日、杉本さんに会えてよかったです」って、めっちゃ涙目で言われて。稲田さんの、その潤んでいる顔が記憶に残っています（笑）
稲 なんてそんなに悩んでたんだろう（笑）

ふりかえる

稲 僕が3代目の編集長になったのは2020年の春でした。58号から63号まで、毎号ほんまに手探りのなかで制作してきた、その誌面が杉本さんの目にとど映っているのか、すんごく気に入ってまして。
杉 感想を言うなんておこがましいですけど、私はいつもなにかを読んでいるときに「私はどうなんやろう」って思うタイプなんです。なので、率直に思ったことを伝えますね。

稲 実は、今日までに全号を読み直すつもりだったんですけど、読んでいるうちに恥ずかしくなってきた、58号しか読み直せてなくて……
杉 なんてやねん（笑）
稲（笑） 58号の特集本気で地獄は、初の号なんですけど、あらためて読み返すと、コンセプトが走りすぎてる気がしました。
杉 ちょっと肩に力が入ってる感じでしたな。

稲 「僧侶たち」と名乗っている雑誌の地獄特集なのに、仏教の地獄はメインで取り扱わずに、現代で地獄とされているものを取り上げたんですよ。『僕らはそっちに行きませんよ』っていう意志がむきだしだったかも。
杉 フリスタは編集長ごとにコンセプトが変わると思うんですが、稲田さんはどう考えられてたんですか？
稲 編集方針として、「行脚、世界。」という言葉が共有してました。三蔵法

師が新しいお経を見つけるために天竺へ旅に出る、みたいなイメージ。仏教の情報誌じゃなくて、もっと雑多でうねうねして、いろんな読み方ができるものにしたかったんです。

杉 旅なんてですね。たしかに、他のページで仏教的な地獄が扱われてないがゆえに、巻頭インタビューのみうらじゅんさんが、どうすれば友だちと同じ地獄に堕ちられるかを懸命に考えた話ば、ものすごく仏教的に響いてきました。
稲 仏教的な記事とそうではない記事のギャップが激しいですね。

杉 59号の特集「ひとり」は、本当に寂しかったんだろうなって思いましたよ。
稲 そうっすねえ。58号のときからずっとコロナ禍で、編集部会議はぜんぶオンラインだったんです。あと、自宅待機をしないといけない時代に、フリーペーパーを入手してもらえない、スポーツに足を運んでもらわないといけなくて、今こんな雑誌を発行する意義って何なんやろうって、思うこともありましたね。

杉 編集長の気持ちの状態とか、向いている方向が一号ごとに、明確に出てますね。で、突然テンションが上がって、60号は特集「BIG LOVE」でした。
稲 不思議だなぁ（笑）
杉 私、実はこの号が一番好きでした。藤山亜弓さんによる巻頭インタビュー「でか美ちゃんBIG LOVE」で、推しについて語るでか美ちゃんの言葉がめちゃくちゃ良くて。



写真= 藤山亜弓

できたかという、仏教だけにのめり込むわけじゃなくて、一定の距離感を保ったまま、常に別の思想哲学や文化、見てきたものや聞いてきたこととセツトで、徐々に近づいていってんです。仏教を通してなにかを見るし、なにかを通して仏教を見る。時には疑ってみたい、時にはとりあえず心に置いてみたい、そういう試行錯誤の連続で、できるだけ楽になるように自分自身を変化させてきた。それを信仰って名づけられるのであれば仕方ないけど、その道程であれば自分は胸を張れるなと思っただけです。

杉 うんうん。
稲 そういう道程で信仰を捉えた場合、「私は〇〇を信仰しています、信仰していません」という告白や、0か1かAかBかみたいな線引きがなく、心のなかにある信仰自体が線的なかたちをしているんじゃないかなと思っただけです。宗教っていわれて想像するような、決められたルートに誘導していく登山型の信仰だけじゃなくて、多方面に線が伸びしながら、時には山を經由したりして、少しずつ自分で道をつくっていく旅型の信仰があるんじゃないかと。
杉 私、今日はこの話題になると思っただけで、久しぶりに仏教辞典を引いてきたんです。まず帰依とは、「優れたものに對し自己の心身を投げ出して信仰すること」。信仰とは、「無垢な心で神仏を信頼し、崇拜すること」。そして、信心が、「疑いを離れた冷静で客観的な信頼。悟りの基盤となるもの」と書かれてあって、信仰を語る上ではこの信心の意味がしっくりくる気がするんです。たしかに、稲田さんの言う登山型はいわゆる出家者のモデルで、出家をしない人たちの仏教のあり方が、今あんまり語られてないんじゃないかと思えます。

稲 そうそう！日本の民間では昔から、仏教と神道、祖霊信仰とかが結びつけられて、いい意味でごちゃ混ぜで受け入れられてきたじゃないですか。それってなんか、すごく日本的というか、寛容だと思っただけです。たとえば神仏習合の本地垂迹説で、日本の神様は仏なんだって言われて、当時の人はよく納得できたなと思ったりもする（笑）

稲 実には編集をしながら、ずっと悩んでいたのが、信仰や布教についてだったんです。おそらく平成生まれくらいの僕の世代は、カルト宗教に対する怖さがめちゃくちゃあって。伝統宗派に属している自分はカルトではないと思いがながら、でもどこかで自分がやっていると、カルトと構造的にはなにも変わらないんじゃないかっていう怖さがありました。仏教って伝わりと同時に、宿っていくような性質の情報だから、それを扱う媒体として意識せざるを得なくて。

信仰と編集

稲 稲田さんの目には、教えを伝えることの目的が、お坊さんの生活を維持

稲 そうそう。2015年とか、まだ学生のときですかね。
杉 なんやこの人、すごい面白い人が現れたって、皆で言っていました（笑）
稲 それから僕がライター・編集者として独立したときに初めてお会いして、一緒に鴨川を歩いた記憶がありますよ。
杉 稲田さんの印象が強く残っているのは、なにかの忘年会で「久しぶり、元気？」って挨拶したら、ちょっと元気がなくて。

稲（思わず立ち上がり、拍手）
杉 すごく尊かったです。推しには、もちろん商業的な側面もあるのですが、私は阿弥陀さまに話を重ねて読んでいました。いつか会いについても推しは受け入れてくれるって、それももう阿弥陀さまやんって（笑）でか美ちゃんみたいに阿弥陀さまを信仰できてたら、救われることに近いんやろなって思っただけです。

稲 うわー。まさに、それを目指してたから、うれしすぎる。
杉 推しの名前をつぶやいて、いい名前だなあと思いにふける話は念仏みたいでしたね。でか美ちゃんのはたから見てると熱烈な信仰者なんですけど、実はすごく優れたバランス感覚があるから、関係性が成立してるんですよね。
稲 そうなんです。この号は推すという行為や信仰も含めて、ちょっと遠くにある存在と自分との関係性、その距離感について、考えられる号にしたいと思っていました。

稲田ズイキ
フリースタイルな僧侶たち編集長（3代目）。京都府久御山町の称名寺と大阪府能勢町の西方寺の副住職。同志社大学法学部を卒業後、広告代理店で会社員経験を経て、2018年に作家・編集者として独立。著書に『世界が仏教であふれだす』（集英社）がある。



杉 お寺の中にある牛頭天王像なんてインドの祇園精舎の守護神だし、よく考えたら「あれ、神さまやん？」と不思議になるけど、今でも当たり前前に受け入れちゃいますよね。

稲 フリースタイルな僧侶たちでやりたかったのは、伝えるっていう上から下に降りてくる情報の流れではなく、受け入れて縦横斜めにつないでいく編集そのものあり方でした。編集部自体が一本の線になって、さまざまな線につながり、自ら編まれて束になっていくようなイメージ。一冊の雑誌を読むというのはその追体験なんです。最近思いついたんですけど、それが僕らでいう布教の「布」なんですよ。「領土を拡大していく」という意味の布ではなく、「布を編む」というイメージでの布でありたいなと思うんです。

杉 仏教には長い歴史があって、たくさんのお教者がなんとか入口を作ろうとした、その試行錯誤の積み重ねと残骸が、私たちの見ている世界じゃないですか。そのはじまりの一つひとつは、これやったら課題を解決できるんじゃないか、時にはこれは商売になるんじゃないかとか、さまざまな観点から生まれたアイデアだと思うんです。とにかく稲田さんの時代のフリストは、毎回その入口を模索することから始めていて、答え合わせをすることだけは絶対にしないという強い意志を感じました。一号一号、入口を直感的に決めた後から、じりじりと近づいていく



感じが伝わってくる。

稲 62号の特集「金」とか、まさにそうですね。なんで金にしんやろうって作りながらノイローゼでした(笑)杉 私は仕事柄、編集自線で見てしまわんですが、金はぶっつけて選んだなと思いましたが、少なくとも私は編集部側の試行錯誤を一つ一つのコンテンツに感じました。作り手の歩みを追体験して、自分の中の道筋にそれをトレースしながら進んでいくような読み心地ですよ。トレイルルトに近いのかも。

稲 あくそう言ってももらえて、救われた気持ちです。杉 それで思い出したのが、61号の特集「休む」に田中帆夏さんが書かれた、茶道の先生に教えてもらいながら野点をするエッセイ「お茶でも啜ろうではないか」が好きでした。なんかこの人呼吸してるなあって。先生の言葉に身を委ねて、手を動かして、もう一度先生の言葉を杖にしながら、自分でなにかをつかんでいく。物事を学んでいく上で、すごく美しい道の描き方やなと思えました。私の仏道もこうありたいな、と思ったりして。稲 実は僕自身この「休む」号が一番

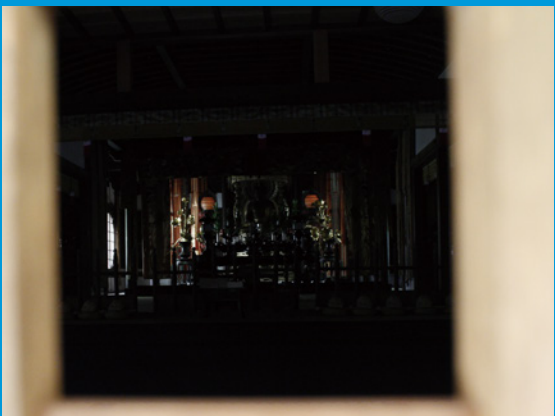
好きなんです。何回も読み返したくなる。稲田さんの優しい感じが出ていて、これまでの号のなかで一番優しい印象がありました。

僧侶と石ころ
稲 いろいろと悩みながらやってきたんですが、なにも救いになっていないのは、発行するたびに「編集部に入りたいです」と連絡をいただいていたことでした。

杉 青森の大学生の方が誌面を読んで、入ってくれたりしたんですよ。稲 それ、ほんまに嬉しかったですよ。おかげで、編集部は僧侶と僧侶じゃない人、ちょっと平々くらくらいで構成されてきました。でも、最後まで悩んでいたのが、雑誌のタイトルが「僧侶たち」なところでした(笑)杉 さっきまでの話を聞くと、稲田さんがやりたかったのは、「フリースタイル仏道」とかになるのかな。稲 アウトサイダー仏道かもしれない(笑)杉 私も、思うところがあるんですよ。私って、仏教界では「在家仏教徒」ってひとくりにされるじゃないですか。稲 そうか。もう在家って、日本だと成り立っていない言葉ですよ。

ないですか。どういう指導を

されているんですか？
杉 まずは「何か言わなきゃいけない」って感覚を
ほどこしてもらいたいので、
たとえばこういうワークを
やるんです。稲田さん、こ
れから質問をするので、即
座に答えてみてくださいい
ね。では、稲田さんにとっ
て……南無阿彌陀仏とは？
稲 え！え、な、名前を呼
ぶこと！
杉 南無阿彌陀仏とは？
稲 えー……光？
杉 間髪入れずに！南無阿彌陀仏と
は？
稲 うーん……過ぎ去りしものを、見
ている。
杉 南無阿彌陀仏とは？
稲 声があるということ！
杉 南無阿彌陀仏とは？
稲 い、生きています！
杉 ありがとうございます。これをグ
ループで順番に一人ずつ答えてもら
うんです。そして5周目くらいで、宗
派の教義に近い回答は出尽くすん
ですよ。「おばあちゃん」「真珠のネッ
クス」「道端の石ころ」とか、本人
すら思いも寄らない言葉が出てくる
んです。それから、短歌でもラップ
でも小説でもなんでもいいので、と
にかく手を止めずに書いてくださ
いってお願いすると、「私にとって南
無阿彌陀仏と



は石ころである」っていう、聞いたことのない法話が生まれるんです。稲 このワーク、めちゃくちゃおもしろいですね。

杉 自分の中から生まれた言葉で法話を組み立てることって、今の布教の研修過程では難しいんじゃないかなって、でも稲田さんは、最初から「自分のなかにない言葉を語るのって、なにそれおいしいの？」くらいの雰囲気、活動をはじめてるじゃないですか。私はそこがすごく嬉しかったなと思うんです。

稲 そう言ってもらえたら、嬉しいなあ。石ころで思い出したんですけど、僕3年前に山で石ころを拾ってきて、それにジョイって名前をつけて、それから毎朝ずっと「ジョイ」って呼んでるんです。杉 なんてやねん(笑)稲 自分なりの南無阿彌陀仏の研究なんです。たまに日向ぼっこをさせたりね。

代謝する仏教

稲 こうやって振り返っていると、仏教と現代社会との間にはまだまだ構造的な問題があって、もってできることがあったんじゃないかって、悔しい気持ちになってきますね。杉 私、思うんですよ。そういう構造って、人間という生き物の習性として免れないんじゃないかなあって。大切なものができれば守りたくなるし、そのためには仲間を集めて、信仰を募って、他の人にも伝えたい。組織ができれば、守るためにお金が必要になってくるわけ。

稲 はい。杉 でも結局、それも含めつつ、私が出会ってきたようなおもしろいお坊さんたちが登場してきたり、これからやってみようという新しい人たちが出てきたりして、解体・再構築されてきているのは、仏教が人間そのものの真理をつかんでいるからじゃないかなって思っています。

稲 すごくわかります。杉 人間という自然をよくわかっている教えなので、最終的にはその教えを受けた人が、自分で手づかみをはじめると。だから、構造的な課題はあるんだけど、それを解きほぐす鍵も一緒に持っているんじゃないかなって。稲 システムを更新していくプログラムがもうすでに組み込まれているってことか。たしかに、これまでの仏教の歴史も、時代や土地ごとに適用しながら芽吹いていったものですね。

杉 そうそう。彼岸寺で連載しているときは、ずっとそれを思いめぐねていましたね。私は何なんやろうって。稲 杉本さんはどういう道程で、仏道を歩んでこられたんですか？

杉 私は珍しいと思うんですよ。100%自分のペースで歩いてこれました。たとえば、この法然院さんは気持ちのいいお寺になって感じていて、学生時代からよく訪れてました。そういう縁があって、たまたま私がお坊さんのインタビューをやりたと思ったときに、一番最初に浮かんできたのが、法然院住持の梶田真章さんだったんです。稲 そういふ経緯だったんですね。



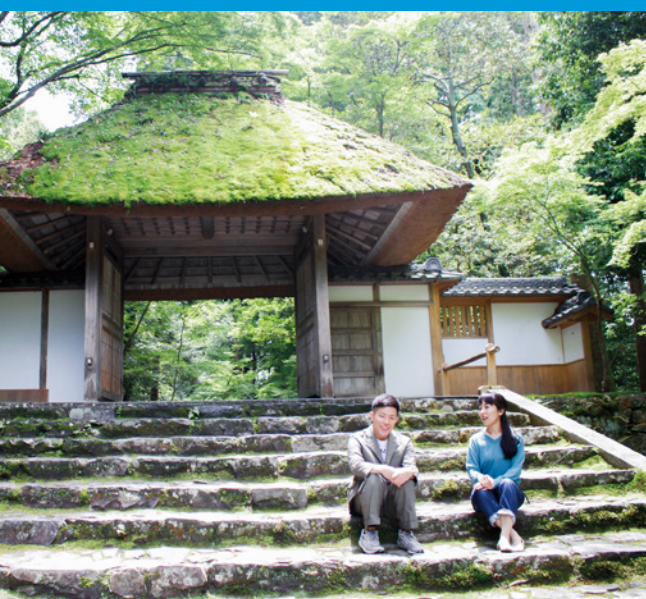
杉本さんに取材してもらった記事が宝物だと稲田は語る。大法輪 2020年4月号掲載「お寺のソーシャルデザイン 第12回若き僧侶が「遊行」に出る理由」

杉 先いっていいんですけど、稲田さん、お坊さんって、人前で間違っちゃいけない、答えがなきゃだめっていう強迫感がどうしても強いじゃないですか。素晴らしい責任感だと思んですけど、それがゆえに自分で答えを手作りする機会が少ないんですよ。誰が悪いわけでもないけど、ある意味では呪縛ですよ。稲 杉本さんは、布教師をされているお坊さんを対象に、寺報づくりの講師をされているじゃ

杉 余白を置いておくって、なにか独特のセンスというか、平衡感覚なんだと思います。お坊さんって、人前で間違っちゃいけない、答えがなきゃだめっていう強迫感がどうしても強いじゃないですか。素晴らしい責任感だと思んですけど、それがゆえに自分で答えを手作りする機会が少ないんですよ。誰が悪いわけでもないけど、ある意味では呪縛ですよ。稲 杉本さんは、布教師をされているお坊さんを対象に、寺報づくりの講師をされているじゃ

杉 だから、フリストの編集長ごとに色が変わる仕組みは、フリースタイルの名の通りんじゃないかな。私が総括するのは変ですけど(笑)稲 きれいにまとめているので、ありがとうございます(笑)編集部が代謝していくのは、すごく仏教的なのかもしれないですね。杉 次の編集長へ、稲田さんから受け渡したいことはありますか？稲 えーなんだらう。編集って、なにか出版物を出すってことだけじゃなくて、全部じゃないですか。稲 うん。

杉 誰を集めて、どう毎日雑談して、どう会議を開いて、そのすべてが誌面に出ると思うので、無理に装おうとすれば、どこかで無理が出ちゃうんですよ。さー石ころの話が出ましたけど、石ころをどう眺めるかってところから、誌面ってつながっていると思うんです。なので、一人の人間としての編集を目指してほしいなあと思います。杉 たえば、それがバックパキの法衣を纏った誌面でもいいんですよ。稲 そうです、そうです！それが編集の道ならば。杉 一読者としても、新しいフリストを見せてもらえたら、嬉しいですね。稲 楽しみですね。杉本さん、今日はありがとうございます！また話聞いってください。



杉本さんゆかりの法然院にて。フリストの法人サポーターとして長年ご支援いただいています。

フリースタイルな僧侶たち 協賛法人サポーター

■浄土宗 延命寺（堺市堺区）吉祥寺（萩市）慶蔵院（伊勢市）金剛寺（京都市東山区）西明寺（尼崎市）西林寺（大阪府泉南郡）正覚寺（青森市）清浄華院（京都市上京区）正善寺（伊丹市）称名寺（京都府久世郡）勝楽寺（町田市）新善光寺（札幌市中央区）青岩寺（青森県上北郡）善願寺（甲賀市）善道寺（札幌市豊平区）臺鏡寺（枚方市）檀王法林寺（京都市左京区）潮音寺（東京都大島町）念佛寺（八幡市）梅窓院（港区）法岸寺（静岡市清水区）寶松院（港区）法善寺（大阪府中央区）妙慶院（広島市中区）龍岸寺（京都市下京区）
■浄土宗西山禅林寺派 宝泉寺（津島市）
■浄土真宗本願寺派 覚円寺（福岡県築上郡）教専寺（赤穂市）幸教寺（大阪市生野区）光照寺（大阪市東淀川区）西方寺（大和郡山市）

西法寺（北九州市）正源寺（大津市）浄満寺（大阪府西成区）信覚寺（福岡県朝倉郡）崇興寺（福山市）養法寺（金沢市）
■真宗大谷派 正蓮寺（伊豆の国市）護念寺（新潟市）宝皇寺（函館市）
■浄土真宗東本願寺派 緑泉寺（台東区）
■天台宗 圓融寺（目黒区）正明寺（姫路市）本覺寺（横浜市鶴見区）
■高野山真言宗 薬師院（岸和田市）
■真言宗御室派 三津寺（大阪府中央区）
■真言宗須磨寺派 須磨寺（神戸市須磨区）
■臨済宗妙心寺派 圓光寺（台東区）宜雲寺（江東区）勝林寺（豊島区）陽岳寺（江東区）龍雲寺（世田谷区）
曹洞宗 四天王寺（津市）瑞生寺（浜松市中区）南詢寺（守口市）鳳仙寺（宮城県亶理郡）

■日蓮宗 池上實相寺（大田区）
■単立 五百羅漢寺（目黒区）瑞聖寺（港区）法然院（京都市左京区）
■企業・団体・店舗 アンカレッジ（港区）生田化研社（豊島区）有限会社石の坂本（台東区）大阪石材工業株式会社（富田林市）京美仏像（京都市北区）薫寿堂（神戸市灘区）神戸数珠店（京都市下京区）作島（京都市下京区）寺院コム（京都市左京区）翠光堂阪急淡路駅前店（大阪市東淀川区）大正大学（豊島区）学校法人鎮西学園（熊本市中央区）豊田愛山堂（京都市東山区）一般社団法人日本石材産業協会（千代田区）はせがわ（文京区）福生（堺市西区）

（敬称略・順不同）

サポーターを募集しています

フリースタイルな僧侶たちは、無料のマガジンです。現在の収益はグッズ販売以外はなく、発行ができていないのは、ひとえにみなさまのご寄付のおかげです。編集部一同、さらに充実した誌面にすべく励みますので、サポーターとしてご支援いただける方は、公式サイトよりお申し込みいただくと幸いです。

[年会費]
個人 5,000 円 法人 30,000 円

[特典]
・発行ごとに冊子を送付
・主催イベントにおける優待
・誌面の協賛法人欄にお名前を掲載（法人のみ）

サポーターのお申し込みは
こちらからお願いいたします。
<https://freemonk.net/support/>



発行記念グッズ発売予定！
詳細は各種 SNS からチェックしてください！

X @freemonk_web
Instagram @freemonk_official

フリースタイルな僧侶たち 第63号
2024年6月23日発行

発行人 加賀俊裕
編集長 稲田ズイキ
編集 鵜飼ヨシキ、わかめかのご
編集協力 釋 大智、苔米地結子、秦正顕、藤山亜弓、K.Norimasa、m.ito
校正協力 森 愛佳、ビビディバビディ部 タケン
デザイン 福井裕孝
Web制作 磯部亮太
表紙デザイン 平山昌尚

発行所 フリースタイルな僧侶たち
〒542-0085 大阪府大阪市中央区心斎橋筋2-7-12
TEL 050-5583-4330
Mail info@freemonk.net

www.freemonk.net

編集部よりご挨拶



写真＝安武慶哉

フリースタイルな僧侶たちに関わるすべてのみなさま、初めまして。秦正顕と申します。この度、三代目編集長のズイキさんよりバトンをもらい、四代目編集長を引き継がせていただくことになりました。

私がフリースタイルな僧侶たちに出会ったのは、10年前のこと。当時は大学生で、お寺で生まれたものの僧侶になりたくなかった私に、仏教の裾野の広さと可能性を示してくれたのがフリストアでした。読んだ感動そのままに深夜バスに乗り込み、当時編集長だった若林さんに会いにいき、たくさんのことを教えてもらいました。振り返ると、その言葉たちが、今日の自分へと導いてくれたと感じています。そんなフリースタイルな僧侶たちに、今度は作る側として関わらせていただくことになり、心から嬉しく光栄に思っています。

この15年、フリースタイルな僧侶たちが、フリーペーパーという形態で毎月1万部以上もの冊子を発行し続けてこられたのは、ただただ支えてくださる皆さまのおかげです。これまでの歩みに感謝し大切にしながら、これまで以上に多くの人たちに、仏教の豊かな世界に出会ってもらえるきっかけ作りができればと思います。僧侶やお寺に関わる皆さま、そして、これから仏教に出会っていただくの方々と一緒に、フリースタイルな僧侶たちを盛り上げていけたら嬉しいです。これからもどうぞよろしくお願いたします。

第四代編集長 秦正顕（写真左）

15周年記念号、特集「謝」いかがだったでしょうか。これまでの期間、長きに渡って活動することができたのは、ご支援くださっているサポーターのみなさま、発行をたのしみに待ってくださっている読者のみなさま、制作を手助けくださっている関係者のみなさまのおかげです。心より感謝申し上げます。

弊誌の特徴は、編集部が代読していくところにあります。今号をつくったのは三代目の編集部で、これが最後の発行になりました。活動はコロナ禍の最中からはじまったこともあり、発行の意義を自問し、悶々と悩んでは、自分に受け渡されたバトンの重みを感じ、編集に励んだ日々でした。成し遂げたと胸を張れるものはびっくりするほどに、ただ最後となるあとがきを書いている今、ありありとこの手に伝わってくるのは、こんな言葉も誰かが読んでくれることへの喜びと感謝でした。ひとりではなく複数人で集まって、自らの思うところを表現し、さまざまな文脈を編み込みながら、一冊の本に綴じて届ける。そして、それを受け取ってくれる読者の方々がいる。その尊さに気づけたことが、私自身の何よりも宝物になりました。

これまでみなさまからいただいた15年分の思いを胸に、これからも続いていくフリースタイルな僧侶たちを、よろしくお願いたします。たまたまこの号を手にとった方、次号もどこで見つけてくださいね。またどこかでお会いしましょう。

第三代編集長 稲田ズイキ（写真右）

